

目次

ページ

平成25年度 学術講演会	スポーツを活用した街づくり(永田靖氏).....	1
第3回都市計画研究会	歴史的町並み・建築とまちづくり(シリーズ第4回).....	3
支部地域活動助成事業報告	四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会.....	4
特別企画	広島アンデルセン旧館から学び・語り合う会.....	6
まちトーク2013in 広島	みんなでつくろう「やさしいまち」.....	9
ホットコーナー	ミャンマー体験(復建調査設計(株)佐伯達郎).....	10
会員紹介	宮崎耕輔氏、古川のり子氏.....	14
今後の活動予定	15
編集後記	15

平成25年度 学術講演会

日時:平成25年12月8日(日) 14:00~16:30

場所:広島工業大学 広島校舎 201室

テーマ:スポーツを活用した街づくり

プログラム:

1.開会挨拶 学術委員会委員長 三浦 浩之
(広島修道大学人間環境学部長)

2.講演 広島経済大学経済学部
スポーツ経営学科教授 永田 靖

3.ディスカッション

4.閉会挨拶 学術委員会副委員長 篠部 裕
(呉工業高等専門学校 教授)

主催:公益社団法人日本都市計画学会中国四国支部

後援:広島市,公益社団法人土木学会中国支部,
一般社団法人日本建築学会中国支部

参加者:18名

今年度の学術講演会は、広島経済大学永田靖先生をお招きして「スポーツを活用した街づくり」と題して開催した。永田先生は広島市のサッカースタジアム建設協議会の委員を務められており、スポーツファイナンスを専門に幅広く活躍されている。



折しも講演会前日にはサンフレッチェがJ1連覇を果たし、参加者の関心も高く時宜を得た講演会となった。

以下、講演の概要を紹介する。

はじめに

広島市はプロ野球やサッカーなど8競技10団体のスポーツ組織が集まり、地方都市としては世界的にも珍しい。スポーツは感動と勇気を与えてくれるが、今回のサンフレッチェの優勝も広島を活気づけている。

2020年東京五輪開催決定

2020年のオリンピック開催地が東京に決定されたことで国民に高揚感と一体感が生まれた。ヘリテージゾーンと

東京ベイゾーンでコンパクトな五輪をテーマにしたことが審査員に受けた。オリンピックの波及効果は150兆円と言われているが、ファイナンスからは気になる面もある。

メイン会場となる新国立競技場は、イギリスの建築家ザハ・ハディッドのデザインが採用された。当初デザイン案は一部見直されているが、8万人収容の会場は開催後の利用が難しく、これまでの開催国ではダウンサイジングして利用されている。

広島の実況

広島ではカープのクライマックスシリーズ(CS)初進出は最低でも約15億円の直接的経済効果をもたらした。パブリック・ビューイングに行った人やデパートの記念セールなどカープ人気は経済効果に繋がった。最近では首都圏でカープ女子が増加しているが、広島市の若い女性にも動機づけしカープファンを増やしたい。

またサンフレッチェが地方クラブで連覇したことはセンセーショナルだった。これまで連覇した川崎ベルディや鹿島アントラーズ、浦和レッズはいずれも首都圏のクラブで、年間45億円規模の売り上げがある。サンフレッチェが売上30億円程度の地方クラブとして連覇を果たしたことは注目すべきである。

スポーツの定義づけ

SPORTの語源は、S(離れる)-PORT(現実)-S(複数形)であり、リフレッシュする行為を意味している。スポーツとの係わりは、「する」、「みる」、「支える」があるが、これに「話す」、「聞く」を加え、さらにどこでやるかなど「考える」ことが必要である。スポーツには「場」、すなわち誰もが容易にスポーツに楽しめる環境が必要であるが、これはビジネスとしては限界であり行政が係わる範疇と言える。

スポーツビジネスとは

ビジネスモデルの基本は、「衝動買い」→「満足」→「リピーター」というステップを経て、利益の極大化に繋がる。スポーツのビジネスモデルは、ファン・リピーター→入場料→スポンサーフィー→マーチャンダイジング→放映権料

→顧客満足というルーチンである。スポーツは空間エンターテイメントであり、日本で最も優れているのは東京ディズニーランドである。顧客満足と従業員満足が両立することで多くのリピーターを生みだし、Win-Winの関係が成立している。オリエントランドでは来園者一人当たり10,336円を消費するが、滞在時間を延ばすことでおカネを落とす仕組みができています。

スポーツ組織のビジネスモデルは、クラブ→地域・サポーター→ブランド形成となり、空間エンターテイメントとして感動を享受することである。スポーツの商業化は、1984年夏季オリンピックロサンゼルス大会で始まった。徹底的に支出を抑えて収入を増大させ、2億1500万ドル黒字化させた。利権ビジネスが確立した。

日本の国内スポーツ産業の市場規模は10兆円に迫っている。クラブ収入はチケット収入頼みであるが、選手年俸の高騰がクラブ経営の課題となっている。負のスパイラルにならないようにする必要がある。

若い世代がなぜスタジアムに行かないか。ブラックスポットと呼ばれる15~22歳世代のスポーツ離れが加速化し、広島をスポーツ界を若者が知らない。TOPSひろしまという広島をスポーツを紹介するホームページもあるが、残念ながらあまり機能していない。

スポーツ組織の財務基盤

スポーツ組織の財務基盤は厳しい。カーブ球団は利益を出しているが、プロ野球で黒字は3球団に過ぎない。プロ野球は親会社が費用支出した場合に経費とすることができるが、これは昭和29年に国策として作られた会社法に依るものである。しかしJリーグには適用されなかった。

Jリーグは2013年からクラブライセンス制度を導入し、5分野56項目の審査が行われる。特に財務基盤の強化が必要となるが、2012年度は18クラブが赤字で、9クラブが債務超過となっている。サンフレッチェのホームのビックアリーナはクラブライセンス制度の施設基準をクリアしていない。広島スタジアムも座席数が少なく同様である。グローバルスタンダードであるクラブライセンス制度に即したスタジアムが広島にも必要となる。

広島のこれから

これからのスポーツによる街づくりは、スポーツミュージアム、スポーツバー、グルメ、ショッピングなどの複合施設を整備することで参加型スポーツパークを迫すべきである。現在、広島市中心部は空洞化している。カーブで年間60億円、サンフレッチェで14億円の消費が最低限期待できる。最近の商圈調査でも郊外に商圈が分散化しているが、これを是とするか非とするかは重要な課題である。

わが国は未だスポーツを活用した街づくりに至っていない。サッカー界の世界的ヒーローであるSir. Bobby Charltonは「広島は世界的に見ても特別な地である」と言う。広島でのサッカースタジアム建設の課題は、財源の確保、試合日以外の活用方法、行政・経済界との関係であり、行政・地域からの支援は欠かせない。サッカー選手にとつ

てはスタジアムの近くに練習場も欲しいという。

スタジアム建設の事例

ガンバ大阪はホームページを使ってスタジアム建設をPRし、資金の調達状況を公表している。アメリカでは、大学レベルのスポーツでさえ収支が成り立っている。アリゾナ州のGoodyear Ball Parkのように、スポーツパークから街ができ、ショッピングモールができ住宅ができる。スポーツと街づくりの係わりは大きい。

おわりに

これからの広島は追い風である。外国人に人気の観光スポットは広島平和記念資料館がトップ、厳島神社が第4位となっている。しかし外国人は広島を訪れても直ぐに京都へ行ってしまふ。復興、平和、スポーツを組み合わせることで広島のグローバル化を進展させていく必要がある。地域活性化にはおカネが動く仕組みが必要である。



講演を終えて参加者とのディスカッションを行った。その一部を紹介する。

Q：岡山県に球技専用スタジアムを誘致することはできるか。地方に国際的なスタジアムを作る意義はあるか。

A：岡山県はハブ的な位置にあり、広域的に連携を考えるべきである。J2の観客動員数も多いことから、スタジアムへのアクセス性を高めることも重要である。

Q：スポーツを活用して利益が出ている事例は。

A：埼玉スポーツコミッションがある。公共が主体となってスポーツに関する事業を一元的に管理している。

Q：スポーツ離れとなっているブラックスポットの対処方法はないか。

A：スポーツを気軽に観戦して、場を楽しんでもらえば良い。コンパなどを組み合わせても良い。

Q：空間エンターテイメントとして、顧客と従業員の双方の満足度を高めることをどのように実現するか。

A：コアなファンを大切にし、フリンジ・ライトなファンをコアなファンに変えていくことである。選手の情報や選手に会いに行くための情報を提供し、アイドル化していくことも必要である。選手の顔が見えるクラブにすることが大切である。

少子高齢化が進む中で、スポーツというソフト面で広島の街づくりを考えていきたいという篠部副委員長の挨拶で講演会は幕を閉じた。

(文責：周藤 浩司)

第3回都市計画研究会

歴史的町並み・建築とまちづくり(シリーズ第4回)

日時:平成26年1月25日(土)13:30~16:30

場所:サテライトキャンパスひろしま 504中講義室

主催:公益社団法人日本都市計画学会中国四国支部

参加者:31名

1. はじめに

シリーズ第4回(最終回)は、これまでの事例報告(第1回:尾道市、第2回:竹原市、廿日市市宮島、第3回:岡山市ほか)に引き続き、水川恭輔氏(中国新聞社記者)による福山市鞆、榎村徹氏(榎村徹設計室主宰)による倉敷市の講演・報告(第1部)と、両氏と橋本清勇氏(広島国際大学准教授)による鼎談(第2部)という2部構成で行われた。講演・報告及び鼎談の概要を以下に示す。

2. 港町・鞆のいま、そしてこれから~町並みと暮らしの魅力・課題・可能性~

①記者と鞆との関わり:水川氏は2013年3月から鞆の町家を借り、ここを事務所(臨時通信部)兼住宅とし、鞆を取材すると共に鞆の住生活を体験されている。記者と生活者の複眼から鞆の魅力や今後のまちづくりの課題が報告された。

②鞆/港/町/いま:鞆は江戸時代の地図で今も町が歩けるほど当時の町割りが良く残っている。鞆の住民にとって代表的な景観と言えば対潮楼からの弁天島の眺めであるようだが、観光客など外からの者にとっての代表的な景観は常夜灯のある港周辺の景観である。景観一つをとっても、住民と住民以外では捉え方に違いがあると気付く。

③鞆臨時通信部に暮らしてみても:生活で音が聞こえることがここでの生活の証である。住まいと駐車場までは少し離れているが、そのことで住民とすれ違う際に挨拶を交わすことになり、鞆に住んでいることを実感する。徒歩圏で殆どの日常生活が事足りるという点で鞆はコンパクトシティでもある。

④「鞆港埋め立て・架橋計画」再考:住民と観光客で街に対する思いが違いうように、同じ住民の中でも守りたい物や改善したい生活はそれぞれ異なる。将来、街のあるべき姿は皆が全員一致するものではない。埋め立て・架橋計画に当たっては、そのような多様な価値観の存在をお互いに認め合うことが重要であるが、その摺合せはほんとうに難しい。

⑤町おこしの糸口:港や町家などのハードだけでなく、住民の営みなどのソフトも町並みを創る。鞆の祭りの行列は鞆の町並みを演出する上で重要な要素である。祭りを通りを行き交う人々の流れを見て感じることは、人の流れは街にとっての血の流れであるということだ。高齢化に伴い祭りの担い手不足も問題とされるが、解決のためには外から人を呼び込み定住を促進することが課題である。

3. 町家・町並み再生の現場の力~倉敷を中心とした取り組みを通じて~

倉敷市出身の榎村氏はこれまで倉敷を主なフィールドとして建築設計活動に携われてきた。これまで手掛けた作品の約半分は古い民家の再生であるが、30年前に民家の再生を始めた当時はニーズもなく、ある種異端児扱いされた。しかし、イタリアの石畳の街を真赤なフェラーリが走る光景に魅力を感じ、古い歴史と新しい生活(今)が共存する空間の創出を目指した。建築設計者として心がけたことは、そこに住む住民が自分自身の生活や地元の文化にプライドを持つことができれば街は変わるということである。このことを意識して町家・町並みの再生に尽力してきた。1年に1つの建築でもそれが30年続けば30の建築となり、通りの2~3割が質の高い建築で構成されれば街は変わる。

住み手は小さいことで良いからできることを見つけて実践すべきである。例えば建物の入口に暖簾を吊るすだけでもまちに対する一つのアクションとなる。現在、倉敷市のタウンマネージャーを担当しているが、個人的には観光業のためのまちづくりには関心はなく、住民の生活の拠点として町家を如何に再生するかに関心がある。地元住民にとって魅力的な住まいや生活空間ができれば、結果としてそのことが観光客を倉敷に引き付けることにも繋がる。

講演の後半では、約30年間、氏が倉敷市で取組んでこられた民家再生の事例(旅館、レストラン、店舗、事務所など)が写真で紹介された。

4. 鼎談 歴史的町並み・建築とまちづくりの課題と可能性

2人の講演・報告を受けて、第2部ではコーディネーターの橋本氏を含めた鼎談が実施された。街に外からの人(新しい血)を入れること、住民・新住民・訪問者(観光客)との繋がり感や独自の価値観、色々な立場の人々がワイワイガヤガヤと話せる場の確保、まちづくりの中心になる40代の住民の存在などが、今後の課題として示された。

最後に橋本氏が鼎談のまとめとして、歴史的町並み・建築とまちづくりを人の体の仕組み「肺(新鮮な空気は外の人・・・)、心臓(血=人を循環させる)、筋肉(端々の生活や営み)」に見立て、第4回都市計画研究会が終了した。



写真1:鼎談の様子



写真2:会場の様子

(文責:呉工業高等専門学校 篠部 裕)

H25年度 支部地域活動助成事業報告 四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会

日時：平成25年10月31日(木) 13:30~17:15
場所：坂出市民ふれあい会館 2階 多目的ホール
プログラム：
第1部：情報交換会(13:30~15:15)
第2部：まちづくり説明会・見学会(15:30~17:15)
参加者：30名

四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会	
＜2013年度 日本都市計画学会中国四国支部 地域活動助成事業＞	
開催日時	平成25年10月31日(木) 13:30~17:15
会場	坂出市民ふれあい会館 2階 多目的ホール (25回は実施済み)
受付開始	13:00
プログラム	<p>＜情報交換会＞13:30~15:15</p> <p>① まちづくりに関する最近の話題 <small>(田園都市整備局(現)都市調整官 池本伸一氏)</small> <small>(若者と地域の共同による地域活性化の可能性 -shared partnership-)</small> <small>(坂出市役所 三野田耕治氏 香川大学大学院 高塚創氏)</small> <small>(コミュニティのマスタープランに基いた自動車の利用促進による</small> <small>まちづくりへの影響分析)</small> (香川警察専門学校 高塚 耕治氏)</p> <p>＜まちづくり説明会・見学会＞15:30~17:15 坂出市人工地とその他の事例について <small>(坂出市建設局建設課 松浦慎一氏)</small></p>
懇話会	17:30~19:30 多目的・JR坂出駅前(別途) 定費：4,500円(予定)



今年度も、四国地方整備局建政部のご協力を頂き、2013年度地域活動助成事業として「四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会」を開催した(申請者:香川大学大学院・高塚創)。坂出市・綾宏市長と四国地方整備局・丸尾浩部長のあいさつに続き、情報交換会(3件の話題提供)、坂出市秘書広報課・松浦慎一氏と坂出市建設課・三好健太氏によるまちづくり説明会および見学会を行った。

＜情報交換会＞ 13:30~15:15

(1) まちづくりに関する最近の話題

(四国地方整備局建政部 都市調整官 池本伸一氏)

池本氏からはまちづくりに関する最近の話題として、4つの話題を提供していただいた。1つ目は「地方都市の再構築(リノベーション)」についてである。地方都市では、人口減少と高齢化、地場産業などにより、地域の活力が低下しており、経済社会情勢の変化に応じた都市の再構築が喫緊の政策課題とされている。そういった背景のもと、地方都市リノベーション事業が実施され、松山市や新居浜市では実際に活用されていると説明があった。2つ目に、「低

炭素まちづくり」についてである。まちづくりに地球環境に優しい少子高齢社会における暮らしなどの新しい視点を持ち込み、住民や民間事業者と一体になって、コンパクトなまちづくりに取り組むための第一歩として「都市の低炭素化の促進に関する法律」が平成24年9月に制定されたが、



平成25年度においても、既存の財政支援制度に加えて、低炭素まちづくりを一層強化に進めるため、予算の拡充が行われた。それらの予算はコンパクトシティ形成支援事業の創設や集約都市開発事業に対する支援強化等に充てられると説明があった。3つ目は、「官民連携によるまちづくり」についてである。これまで国や地方公共団体等が所有する都市基盤・公有地は、国・地方公共団体等が公的な観点から自ら活用しており、民間が活用する場合も、収益目的による利用は抑制されていた。しかし、今後は公共施設等において民間による収益活動を積極的に認めることにより、管理の高質化等に加え、まちの活性化等の新たな公共貢献が可能となったと説明があった。最後に「耐震改修促進法の改正」についてである。南海トラフの巨大地震や首都直下地震の被害想定で、これらの地震が最大クラスの規模で発生した場合、東日本大震災を超える甚大な人的・物的被害が発生することがほぼ確実視されており、住宅・建築物の耐震化の促進が喫緊の課題であるため、平成25年5月29日建築物の耐震改修の促進に関する法律の一部を改正する法律が公布されたと説明があった。質疑応答では官民連携によるまちづくりでは、ハード面以外のソフト面においても支援は行われるのかといった質問がなされた。

(2) 若者と地域の共同による地域活性化の可能性 ー坂出市人口減少抑制に向けてー

(坂出市役所 三野田耕治氏 香川大学大学院 高塚創氏)



三野田氏からは、坂出市が抱える人口減少の問題とその対応策について報告があった。この研究においては、坂出市の市内外の人の坂出市に対するイメージを調査し、さらに居住地選択の要因を発見することで若年期の地域との接触・コミュニ

ケーションが与える地域への愛着及び居住選択の関係性を明らかにし、人口減少抑制への取り組みを提言することを目的としている。アンケート分析を行った結果、「若者と地域の共同による地域活性化策」の必要性が明らかになり、その結果を踏まえ、坂出市内4校(坂出商業高校、坂出工業高校、坂出高校、坂出第一高校)に存在する独特の科を活かした「出前演奏」や「ファッションショー」など、若者と地域の共同による地域活性化策の提案をされた。質疑応答においては、企業に就職した社会人を対象とした「居住地選択要因」のアンケートでは、就職や進学で県外へ移住する可能性の高い高校生の意見を反映することができないのではないかという指摘がなされた。

を発足させている。今年度のテーマは「人工土地の活用策」であり、両氏はそのプロジェクトメンバーである。



まず松浦氏から、近年の坂出市の人工土地について詳しく説明いただいた。坂出市の人工土地は、法律上も土地として位置づけられている全国的にも珍しいもので、構造やデザインも素晴らしく、建設資産としての評価は高い。しかし、現在では薄暗さが引き起こす立ち寄り難さやまばらな入居状態による空虚性が問題となっており、「陸の孤島から天空のまちへ」というコンセプトを基に再生に向けて話が進められている。再生計画のキーポイントとして①高齢者が利用しやすく、住みやすい環境づくり、②防災施設としての役割、③子育て支援施設としての機能、④コミュニティ空間の創出、⑤人工土地の管理運営主体の5つがあげられた。その後、質疑応答においては、居住空間のコミュニティの場の整備について、人工土地の特色を活かした若者入居者増加の対策についての質問があった。見学会では、人工土地の内部を実際に歩きつつ、両氏に現状を説明いただいた。



「陸の孤島から天空のまちへ」というコンセプトを基に再生に向けて話が進められている。再生計画のキーポイントとして①高齢者が利用しやすく、住みやすい環境づくり、②防災施設としての役割、③子育て支援施設としての機能、④コミュニティ空間の創出、⑤人工土地の管理運営主体の5つがあげられた。その後、質疑応答においては、居住空間のコミュニティの場の整備について、人工土地の特色を活かした若者入居者増加の対策についての質問があった。見学会では、人工土地の内部を実際に歩きつつ、両氏に現状を説明いただいた。

<懇親会> 17:30~19:30 (JR坂出駅前「美膳」)

情報交換会、まちづくり説明会・見学会も無事終了し、有志で懇親会を行った。場所は、JR坂出駅南出口を出てすぐの「美膳」という落ち着いた雰囲気のと食料店へ。旬の素材を活かし、美しく彩られた絶品料理を楽しませていただいた。

出席者は、四国地方整備局関係者4名、大学関係者4名、自治体(坂出市)関係者6名の合計14名で、大変盛り上がった会となった。また、坂出市・綾市長にも参加していただいたことで、坂出市の活性化やまちづくりについて、様々な立場から語り合うことができ、貴重な時間を過ごすことができた。愛媛大学名誉教授の柏谷先生が四国地方整備局のご協力のもとに始められたこの会を、是非今後も続けていきたい。(文責:高塚 創)

(3) ライフサイクルステージに着目した自動車利用可否による外出活動への影響分析

(香川高等専門学校 宮崎耕輔氏)

宮崎氏からは、自転車運転できなくなった場合支障を来すか否かは、家族構成によって、異なるのではないかと問題意識の下、Webアンケートを利用した分析結果による研究報告がなされた。



LCS(ライフサイクルステージ)による交通利用環境属性の比較により、マイカー族は、非マイカー族よりも支障を来しやすい

傾向にあることがわかり、家族構成でみると、11歳以下の子供をもつ“子育て世帯”は、自動車を運転できなくなると、外出活動に支障を来しやすいことが導き出された。このことから、LCSごとにはできる施策は異なると考えられるため、どのような支援をすると、住民の定住を増やすことに結びつけることができるかが、今後の研究の課題であると話された。質疑応答においては、11歳以下の子供をもつ“子育て世帯”が自動車を運転できなくなると、外出活動に支障をきたしやすい要因と、具体的な支援策について質問があった。

<まちづくり説明会・見学会> 15:30~17:15

坂出市人工土地とその活用策について

(坂出市秘書広報課 松浦慎一氏 坂出市建設課 三好健太氏)

坂出市では重要な政策課題に迅速に対応するため、若手職員の斬新かつ柔軟な発想を活用し、限られた予算の効果的、効率的な執行を図ることを目的として、若手職員により構成された坂出市若手職員政策提案プロジェクトチーム

広島アンデルセン旧館から学び・語り合う会 ～見学会+ディスカッション(ワークショップ)～

日時 2013年 12月 14日(土)

見学会 広島アンデルセン旧館

15:00～ 15:45 参加者：21人

ディスカッション(ワークショップ)

16:15～ 18:40 参加者：20人

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ 研修室A

【プログラム】

情報提供：広島アンデルセン旧館の88年、見学会の振り返り(スライド)

広島アンデルセン旧館の価値・魅力を再認識し、語り合おう(見学会の感想、アイデアなど)

はじめに

10月6日の中国新聞・朝刊、及びその他マスコミ報道から、広島アンデルセン旧館を所有されているアンデルセングループにおいて、2018年の創業70年に合わせ、旧館の改装等を検討されていることを知りました。

これを契機に、私たち都市計画や建築に携わる者を含め市民が、広島アンデルセン旧館を取り巻く状況を踏まえ、これまでの保存・継承の取組と尽力を知り、感謝しながら、この建物の価値・魅力を再認識するとともに、建物の担ってきた役割や未来への思い・アイデアなどを語り合う場を設けたいと考え、「見学会とディスカッション(ワークショップ)」を開催しました。

1 見学会

見学会は、午後3時からスタートしました。師走のクリスマス前と言うこともあり、この時間帯でも多くの買い物客等で混雑しており、私たちの想定の甘さを実感することになりました。

それでも店のご配慮で、3つのグループに分かれて店内を見学させていただきました。説明は、店長とお二人の副店長にいただき、また、広報室長にも来ていただき、ありがたさと同時に、申し訳なさを感じるのです。

見学では、店舗のコンセプトや方針、各売り場の構成・特色、旧館と新館の関係などを教えていただきました。また、建築時・被爆の部分、修復・改築された部分などの確認もできました。

さらに、新館の見学もさせていただき、デンマークとの交流やパン文化の提供・発信、もてなしの心、さらには経営理念を感じることができました。

また、新館からは旧館の屋上などを見ることができ、建物の歴史や気づかなかったディテール、本通りなどの現状を垣間見ることができました。



見学会の風景(副店長の説明)

2 ディスカッション(ワークショップ)

ディスカッションは、大きく2部構成で行いました。

最初の広島アンデルセン旧館の概要に関しては、被爆時において多大な被害を受けた建物が修復・再生されたこと、現在の建物において残っている建築時・被爆時の部分の概略、この建物の価値として、それを直し、活かしてきたプロセスも極めて大切であることなどの説明がありました。

続いて、見学会に参加できなかった人や見学会の確認として、スライドを通じた説明がありました。

こうした情報を踏まえ、松波前支部長が全体マスターとなり、3つのグループに分かれてディスカッションを進めました。

見学会の感想など

A班

大きくは、経営(者)のすばらしさ、にぎわいの中心、意匠(建物)の特徴、建築的な不便さなどに関する意見が出されました。

経営に関しては「普通の経営とは違うイメージが発信されている」、「活きた建築」、「デンマークだけでなく、広島の名産も置いてある」などの意見が出されています。

にぎわいに関しては、「広島的生活文化を高めた場所」、「コンバージョンによる商空間」といった意見。

不便さに関しては、「柱が多い」、「入り口付近の段差」、「2階の吹き抜け回りの狭さ」などの意見が出され、銀行の建物を転用した店舗としての苦勞を感じることもありました。

B班

広島アンデルセンの魅力、価値・役割の観点から意見を出し合い、その中にはプラス面とマイナス面、課題がありました。

魅力としては、「銀行建築のイノベーション」、「狭いのを楽しむ空間」、「ゴチャゴチャ感が好き」、「2階の



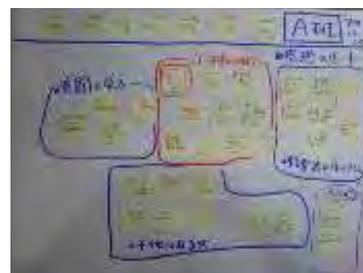
建築時の建物(三井銀行広島支店)
出典:「建築世界」(1925年7月)



現在の広島アンデルセン



松波前支部長(全体マスター)



A班:感想シート



B班:感想シート

壁を残していることの大切さ」などが出されました。

一方、「狭さ」「動線の難しさ」「明るすぎる(陰影の工夫があれば、もっと魅力的)」なども指摘されました。

価値としては、「被爆建物をよくここまで利用」、「人生のような建物」、「広島情報の発信源」、「青山ではなく広島が本店」など。

C班

大きくは、食文化の発信にぎわい、建物の現状、市民の意識、被爆建物、国際交流(デンマーク)に関する意見が出されました。



食文化の発信に関しては「豊かな食文化の提供」、「文化的に楽しい場所」、「食文化の情報発信」などの意見が出されています。

被爆建物や建物の現状に関しては、「よくここまで使っている」、「活きている被爆建物」、「吹き抜けは豊かな空間」などの一方で、「コンクリートの老朽状態が気になる」といった意見も出されています。

また、「被爆建物の説明板(広島市設置)が少し分かりにくい」、「多くの市民は被爆建物としての意識が薄い」と言った指摘もありました。

アイデアなど

A班

意見は、課題に基づき、ソフト・イメージ、プロセス・継承、保存のハード、留意点という形でフロー形式に整理されています。以下、意見の一部を紹介します。

これまでのプロセスを伝える

アンデルセンの真正性は何かを考える

市民などにアンデルセンのことを情報発信する

北欧文化の展示館としても利用

残すのではなく継承：古典様式・コリント式列柱、アールデコ、吹き抜け一部保存(切り取り)は忘れられる(例：旧山口銀行)



A班：アイデアシート

新館を建て替えて構造的な負担も担う

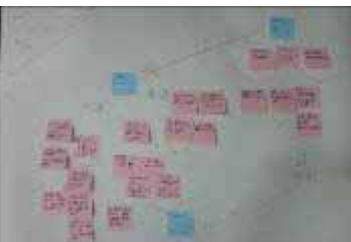
建築界をあげて免震、工法の画期的提案を

金沢の「しいのき迎賓館」は参考になるのでは

民間・市民の推進体制をつくる など

B班

未来への思いとアイデアの観点から意見を出し合い、アイデアについては、大きくは工法と制度に分けることができました。以下、意見の一部を紹介します。



B班：アイデアシート

アンデルセン・ミュージアム：建物や経営などの歴史、部屋を確保するのではなく、動線・通路沿いなどを利用し、史料の展示、説明パネルや写真の設置などを行う入れ子保存(覆い屋)

新しい建物の中に2階の壁(往時の部分)を組み込む改修でなくても、建て替えてファサードの保存(再現) 4本の円柱の復元(改築、建て替えを問わず)

日本一のパン文化の発信地にする

広島の遺伝子として残したい

市民の寄付、市の協力・助成制度の拡充 など

C班

大きくは、建物の保存、アンデルセン物語、アンデルセン広場、具体的な働きかけに関する意見が出されました。以下、意見の一部を紹介します。

アンデルセン物語：建物の変遷を写真・映像・スライドで紹介、被爆建物を伝えるコーナー、これまでの保存・活用の経緯の紹介・アピール、創業者と経営の紹介

被爆建物を使ってきた流れを活かしたデザイン(建て替えの場合も)

既存建物(被爆建物)の保存

コンクリートの躯体の長寿命化の可能性の検討

建て替えの場合は公開空地、アンデルセン広場の確保

袋町小学校平和資料館との連携

デンマークとの交流のPR など



C班：アイデアシート



発表の風景

おわりに

学会員以外の市民の方の参加もあり、様々な観点から意見が出されました。

建物の今後に関しては、既存建物の保存から建て替えまで、多様な意見が出されましたが、共通するのは、使ってきた建物の記憶、吹き抜けなどの空間の豊かさ・特色の継承ではないでしょうか。

また、アンデルセングループをはじめ、これまでの建物の継承・活用に感謝すると同時に、広島の誇りといった意識を感じることができました。こうしたことがベースとなっていて、「アンデルセン・ミュージアム」や「アンデルセン物語」の提案につながっているのではないのでしょうか。

最後になりましたが、この事業の企画段階において、アンデルセングループに見学会のご相談と協力依頼を行いましたところ、快諾していただき、貴重な体験をすることができました。改めて、この紙面を通じて感謝いたします。

(文責：山下 和也)

「広島アンデルセン旧館から学び・語り合う会」 の感想にかえて

松波龍一

- 見学会の個人的な感想のみを簡単に記すと、以下のとおり。
- 思いのほか「保存」された部分は少ない。厳密に言えば、2階の外壁の一部くらいか。
 - しかし、銀行の建物を利用して、多少使いにくいかもしれないが、おしゃれな店舗空間をつくりました、物語を大切にしました、という強いメッセージが感じられる。
 - ヨーロッパの旧市街地や、北米の70年代以降の再開発などによくみられるリノベーション型店舗（というのかどうか？）のテイストをよく再現していて、タカギペーカー自体の企業イメージに強く結びついていることが理解できた。
 - このような姿勢は、今後も顧客・市民の共感を得ていくであろうし、技術やプランニング、政策技術はそれをしっかりサポートしていく必要がある。

アンデルセンの今後に関心をもち、若干一般論となるかもしれないが、気のついた点を2点だけ、以下に覚書として列挙する。

(1) どのような保存か

文化財としての保存を望む人はいないだろうから、逆に、技術的にはいろいろな可能性がありえる。

ケルン（ドイツ）の小さな教会の壁面保存を行うのに、薄い壁一枚を残した後ろに鉄骨のトラスで支えてあったのを見たことがあるが、なかなかおもしろい発明をしたものだと感心した。残念ながら写真がない。

バンクーバー（カナダ）の、コースタル教会というこれも小さなレンガ造の教会は、1918年建造の歴史的建物で、2005年に改修された。改修は地元のホールズ・マーティンという建設会社を中心になって行われたようだ。全体をスチールのリブで外側から挟み込み、まるで新しい造形になっているのだが、それはそれでちょっとしたアートになっていて、しかも「とにかく残すのだ」という気迫が感じられる。これは写真があったので、添付する。



コースタル教会（バンクーバー市）正面



コースタル教会（バンクーバー市）側面から

建築の専門家には、広島での最適解を「発明」してもらいたい。見よう見まねも、ナショナル・スタンダード志向も、前例主義も通用しない本物の舞台である。要するに、手慣れた技術者ではなく、作家が必要なのである。

これから、おそらくさまざまな企画提案が各方面から出されるだろうが、そういう気概をもたない提案は歯牙にもかけない、という雰囲気をもみんなでつくろう。

熊本でやっている「けんちく寿プロジェクト」は面白い。こういうのは、2番煎じでも大いに結構だと思うので、だれか旗を振って見たらどうだろうか。

(2) 街づくりへの組み込み

建物自体を生かして再利用することだけにとどめず、都市空間全体の魅力を高めるために利用する、という観点が必要だ。

ワークショップでの提案に「アンデルセン広場」というのがあったように、周辺の被爆建物、古い構築物をそのほかの文化施設などとネットワークさせた街づくりの動きができるとうい。たとえば、旧日銀、袋町小学校、アンデルセン、外堀の遺構、旧陸軍施設・・・等々が連携した展示プログラムをもつとか、共通のロゴを戴くとか、協力イベントを張るとか、できることはたくさんありそうだ。

そのような動きのなかで、保存建物がしっかりと位置づけられること、文化財ではないけれどもある種の保存を行うことが公共性をもつのだと自然に理解されること。そのための大きな構図を、都市計画はつくるべきではないか。

これまでの、たとえば旧理学部1号館、旧被服支廠などといった、何度もいろいろな活用案の検討された大型物件についていえば、残念なことに、周辺の街づくりの一環として考えるという観点が決定的に欠如していたように思う。

今回の企画を、アンデルセンのみならず、被爆建物全般、もっといえば広島の歴史、先人の情熱に敬意を払い、新しい街づくりに生かしていくような契機としたい。都市計画学会の奮闘に期待する。

それにしても、旧市民球場をあっさり解体してしまったのは、もったいなかった。

みんなでつくる「やさしいまち」

まちトーク 2013 in 広島

日時：平成25年11月23日(土) 13:30~16:00

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ

主催：(一社)建設コンサルタンツ協会中国支部

参加者：46名

昨年まで、7年間「ひろしま自転車トーク」を開催してきた建設コンサルタンツ協会中国支部が、今年は「やさしいまち」をテーマにトークを開催した。非常に幅広いテーマであるが、パネリストの皆さんをはじめ、参加者全員が真剣にこのテーマに向き合い、意見交換を行った。

「やさしいまち」と聞いて、何を思い浮かべますか？

第1部 パネリストによる取組紹介

ショッピングモールシスターズ(SmS) リーダー 植村紗衣氏

広島修道大学の女子学生を中心に、赤のユニフォームで本通り商店街の清掃やイベント活動などを行っている有償ボランティアグループ。HPやブログ、定期情報誌「本通TIMES」の発行など、女子大生の感性豊かな情報発信も行っている。

「やさしいまち」とは、活動の後の仲間の笑顔、知らない人との「ご苦労様」「ありがとう」のコミュニケーションがあるまち。もともとは、お金がほしい、ほめられたい、という気持ちで活動していたが、だんだん自分たちのまちをきれいにしたいと思うようになってきた。自分たちの活動が少しは「やさしいまち」づくりに貢献できているのなか！と思えるようになったことがうれしくて続けている。

NPO法人セトラひろしま 理事長 若狭利康氏

若狭氏は、広島市中央部商店街進行組合連合会の専務理事でもある。商店街は「にぎやかなまち」「さわがしいまち」の部分を担当しており、ある意味では「やさしいまち」に逆行しているかもしれないが、多くの人にとって楽しい、快適・便利、自己表現、出会いの場となるよう、さまざまな取組を行っている。利便性の向上、賑わいづくりに加え、地域と連携した緑化・環境美化活動の推進、無料ベビーカーの貸し出しなどの子育て支援、文化振興に関わるイベントの取り組み等を通じて、「元気な広島」づくりと「やさしい街」づくりの実現に努めている。

まちづくり市民グループ可部カラスの会 事務局長 寺本克彦氏

可部カラスの会は18年の歴史を有する、行動する市民グループである。入会資格は「まちづくりに興味のある人」で、会費も会則もないため法人登録はしていないが、そのことがむしろ自慢。長井自治会とそれを取り巻くさまざまな組織・団体の関連図はまさにコミュニティデザイン。「紡ぐ」を基本コンセプトに、環境、文化、まちづくり、ひとづくりなど、多様な市民活動を展開している。また、地域の安全・安心を支えるため専任性の自主防災会を立ち上げるなど、地域が自立し、支えあう活動を推進している。最近新聞紙上を賑わわせている可部線の復活に絡めてアイデア豊かなコミュニティビジネスを仕掛けるなど、やさしさたくましさ兼ね備えた活動を推進している。

NPO法人ひろしまジジ大学 学長 平尾順平氏

キャンパスも校舎も卒業もないNPO法人ひろしまジジ大学は、広島県を大学と捉えて、県内各地区、各ひとを媒体として新たな学び、繋がり場の場づくりを展開している。みんなが先生であり学生であるという「学び合う」「繋がり合う」学び、市民・住民が主体的に関わる「地域の自分ごと化」による地域づくりに取り組み、県民(潜在的学生)が参加から徐々に参画、担い手へとステップアップできることを目指して取り組んでいる。

繋がる、共有する、自ら関わることを大切にしているひろしまジジ大学にとって、「やさしいまち」とは、他の人(地域)のことを考えるまち、ボトムアップ(参画)のまち、女性と若者目線のまちである。

広島工業大学工学部 教授 福田由美子氏

広島工業大学福田研究室では、学生たちがまちづくりの現場に飛び込み、地域の方々とともに活動することを通して、自ら社会的課題を考え、研究テーマを設定することを奨めている。大学生にとっては「生活」を実態的に知ることや幅広い世代とのコミュニケーション等を通じて責任感や自信を身に付けることができるというメリットがあり、地域にとっても若者の感性や知恵、力(体力)、さらには子供と大人のつなぎ役を得ることができる。

「やさしいまち」とは、幸せを分かち合うことではないか。人はいろいろなことに幸せを感じる。学生はまちづくりに関わることでたくさんの幸せを受け止めてほしい。そしてこの感覚は「住民主体のまちづくり」の基本でもある。

第2部 パネルディスカッション

建コンメンバーの森島氏のコーディネートにより、やさしいまちのイメージ、やさしいまちを学び・教わること、やさしいまちと子供たち、活動を継続する秘訣等、多様な観点から意見交換が行われた。きわめて抽象的かつ主観的なテーマであったにも関わらず、皆さんそれぞれご自身の活動に基づいて、具体的に意見交換をすることができた。

「やさしいまち」の共通点が見出されたとすれば、お互いを知り・思いやり・繋がり(仲間との繋がり、地域の繋がり、他人との繋がり、世代間の繋がりなど)を感じることで、自分が楽しく・幸せな気持ちで活動することは結局自分に帰ってくる、といったことであつたと感じる。

担い手の世代交代など、課題も一部指摘されたが、否定的な意見はなかった。すなわち「やさしいまち」は多くのまちに共通する普遍的な目標像といってよいのかもしれない。「やさしいまち」を具体化するための仕組みや財源などを含めて、今後さらに議論を深めていく価値がありそうなテーマではないだろうか。(文責：佐伯 達郎)



ホットコーナー：ミャンマー体験

このたび、JICA調査団の一員として「ミャンマー国 自然災害早期警報システム構築プロジェクト」に参加し、7月と10月の2回、計2ヶ月間ミャンマーでの現地業務に従事した。今回、紙面をいただいて、ミャンマーでの体験について報告する。

業務の背景

日本ではあまり知られていないが、2008年5月サイクロン「ナルギス」がミャンマー南西部のエーヤワディ地域に上陸し、約14万人の死者・行方不明者を出した。その後の調査で、被害がここまで拡大した要因の1つとして、コミュニティ（住民）までの情報伝達システムの不備が指摘された。私が関わった業務は、サイクロン「ナルギス」が直撃したエーヤワディ地域を対象として、適切な情報をキャッチし、コミュニティまで迅速かつ確実に伝達するシステムの構築とその普及・啓発（対行政、対コミュニティ）を目的とするものである。



サイクロン「ナルギス」の軌跡 HPより

対象地域の概要

ミャンマーには、14の地方行政区（7州、7管区）があり、今回の対象地域はエーヤワディ管区である。エーヤワディ管区の中に6つのディストリクト、26のタウンシップ、約1,900のビレッジトラクト、約12,000のビレッジがある。ビレッジトラクトまでが行政組織で役所があると聞いているが、ビレッジにも出先があるようだ（詳細不明）。

なお、エーヤワディ地域は、テレビはほとんど普及しておらず、ラジオや携帯電話もビレッジに1つしかない地区があるなど、日本の環境とは著しく異なっている。



サイクロンナルギスにより壊滅したビレッジ（写真は復旧後）

竹で造った簡素な住宅が農漁村の一般的な住宅
低湿な地形を反映して、高床式の住宅である

下の図は、エーヤワディ管区の行政界を示したものである。グレーの中の、緑線がディストリクト界、赤線がタウンシップ界、見にくいグレーの線がビレッジトラクト界である。ビレッジの人口は数十人から数千人までと幅が広い。日本の感覚では、ビレッジが字ないし大字に相当すると考えられる。



エーヤワディ管区の行政界（出典：ヤンゴン大学）

業務を通じて感じたミャンマー

業務は4ヶ年かけて実施予定である。この間、ミャンマー関係機関及び関係自治体職員の防災研修、パイロットコミュニティを対象とした防災ワークショップ及び防災訓練等の実施、必要な防災関連機器の点検・改善等を行う。このようにJICAの業務は、机上でのレポート作成に加え、地域に入り込んでの人材育成や必要な機器の設置等も含んでおり、その成果は、地域のコミュニティ防災力の向上と、その成果の国内他地域への水平展開の促進である。

私は、海外業務の実績がないことから、業務の前段に当たるパイロットコミュニティ選定のための基礎調査部分を担当した。具体的には、エーヤワディ地域の自然災害等に対する地域特性の分類、パイロットコミュニティ（ビレッジ）の選定検討（脆弱性評価）を担当した。

なお、このレポートは業務概要の報告ではなく、業務を通じて私が感じたミャンマー体験談である。

サイクロンシェルター(避難所)の建設

被害拡大の要因として、情報伝達の不備に加え避難場所の不備が指摘されている。これについては、学校等を緊急時の避難場所として活用できるよう「サイクロンシェルター」の整備が、私に関わった業務とは別に、JICAをはじめ多くの国やNGO等の支援により進められている。

下の写真は、最も被害が大きかった地域の1つであるラブタタウンシップ内のビレッジに、JICAの支援で建設されたサイクロンシェルターである。平常時は小学校として利用されている。



JICAの支援で作られた学校兼サイクロンシェルター



学校(シェルター)の内部



通学時の様子

ミャンマーでの体験・・・

仕事を離れて、写真を中心にミャンマーで見たこと、感じたことなどを紹介しよう。なお、場所によっては充電ができないこと、湿気の影響等で途中から私の大事なカメラのピントが合わなくなったことに等より、消化不良の紹介になることをお許しいただきたい。



ミャンマーはとにかく子供が多い。どんなに田舎に行っても子供であふれている。平均年齢も日本人よりずっと若い。そのためか、勢いを感じる国、まさに発展途上国である。その一方で、温暖な気候のためだろう、人はのんびりしており、親日的で、親しみやすいお国柄である。



復建調査設計ミャンマー事務所主催の歓迎会(ヤンゴン)
ミャンマー人は歌と踊りが大好き・・・終わらない



復建調査設計ミャンマー事務所の日本人だけの懇親会



調査団の懇親会(ネピドー)

暑いミャンマーではビールが欠かせない。ミャンマービールとタイガービールが有名で、どちらも安くておいしい。



料理は総じて油濃い。



ヤンゴン市内での通学の様子: 緑色のロンジー(巻きスカート)が制服



港町ピヤポンの中心街: 小さい都市だが子供が多く、活気にあふれている

ミャンマーには、日本製の中古車がたくさん走っている(徐々にアジア産の新車が増えているようだが)。丈夫で燃費が良いのが人気の要因だそうだが、道が非常に悪く、移動中2度もバーストした。これは貴重な体験だそうだ。



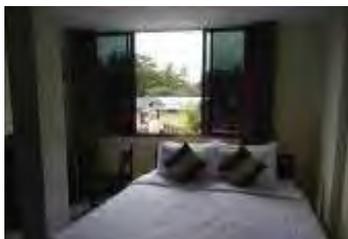
移動中高速道路でパジェロの右後輪がバースト



2日後、今度は左側の後輪がバースト

ミャンマーの中心都市ヤンゴン

ヤンゴンは近年海外からの投資が急増しており、外国人ビジネスマンが増えているため、慢性的にホテルが高い。日本（広島）の一般的なビジネスホテルの1.5倍程度の料金であろう。特に11月から4月頃の乾季は、北欧から避寒目的の観光客が増加するため、ホテル代がさらに高騰する。



ヤンゴンですっかり定宿になったホテル
部屋は広いがロビーやレストランもない民宿のようなホテルが、1泊65ドルもする。



表通り沿いは遠目には美しいが、結構古い建物が多い



路地を奥に入ると、パナキユラーな住宅地



迷路のような路地には商店がたくさんある



ミャンマー最大のパゴダ シェダゴンパゴダ (ヤンゴン)



寝釈迦像 (ヤンゴン)



湖畔 (インヤーレイク)
若者が多いので、カップルが多い (ベンチは有料)



湖畔 (カンドーレイク)
恋人たちの聖地らしい (入場は有料)

新首都ネピドー

新首都ネピドーやその他の地方都市では、ホテルはまだ日本よりだいぶ安い。ネピドーでは最近急速に高騰していると聞いている。下の写真は、ネピドーで宿泊したプール付リゾートホテルである。今回、ミャンマーで滞在したホテル中で、もっと充実したホテルだった。



そのネピドーは今建設ラッシュ。道路整備や政府機関の移転は既に完了し、現在民間施設が建設ラッシュである。



整備が進む新首都ネピドーの様子
エーヤワディ地域(ラプタタウンシップ)

エーヤワディ地域は、ほぼ全域がデルタ上に位置し、大小無数の川が流れ、川沿いに都市が分布している。下の写真はエーヤワディ地域最下流のラプタ地域である。市街地でも河川には護岸堤防のような構造物はなく、今にも浸水しそうである。



ラプタタウンシップ中心部

周辺部(ピレッジ)の様子

終わりに

ミャンマーでは、下痢は通過儀礼である。私もミャンマー到着から数日後にひどい下痢となり、その後ちよくちよく経験した。また、7月の終わりには40度近い高熱を出してダウンし、その後日本に帰ってからも当分せきが止まらなかった。また、2回目の帰路では、ミャンマー空港で飛行機が8時間遅れ、乗り継ぎのバンコク空港で一泊を明かした。これらも海外業務ならではの貴重な体験だろう。

今年も7月後半から1ヶ月、3回目のミャンマー行きが予定されている。今度はインド洋に面したラカイン州が対象地域である。7月のミャンマーは雨季で蒸し暑く、過ごしにくい。日本も似たようなものである、と割り切ってまた行ってこよう。もしまた機会があれば、ミャンマー体験第2弾を報告させていただきたいと思います。

(文責:復建調査設計(株) 佐伯 達郎)



会員紹介

宮崎耕輔 (みやざき こうすけ)

香川高等専門学校 建設環境工学科 准教授
博士(工学), 技術士(建設部門)

略歴

1971年生 / 広島県尾道市出身 / 1996年3月金沢大学大学院工学研究科修士課程修了 / 1996年4月～2004年6月株式会社福山コンサルタント / 2004年7月～2005年3月株式会社計画情報研究所 / 2005年4月～2008年3月金沢大学大学院自然科学研究科博士後期課程 / 2007年10月高松工業高等専門学校 / 2009年10月高度化再編により現在に至る。

はじめり (きっかけは大学 4 年時の研究室配属)

私は現在、地域公共交通計画に関わる取組みをしています。このような取組みをするきっかけになったのは、大学 4 年生の研究室配属だと思っています。私は高山純一先生の研究室に配属になりました。当時、バス交通に関係する研究テーマが掲げられており、興味がないわけではないという理由からこのテーマを選びました。高山先生が、学位論文でとりまとめたおられたリンクフローデータから OD を推計しようとする手法を用いて、バス停間 OD を予測するシステムを構築しようという研究でした。大学院修士課程ではバス路線網再編について、組合せ最適化問題を解く手法を用いて構築するシステムの開発に取組みました。当時は、まったく現場のことがわからずに、取り組んでいたと思います。

その後、就職してお世話になった福山コンサルタントでは、公共交通に関わる業務、特に、鉄道整備計画に関わる業務を担当させていただきました。

高松高専に着任して

2007 年に高松高専に着任してからは、公共交通を取り巻く環境が大きく変わり、私の学位論文で取り扱った「公共交通が不便な地域におけるモビリティの確保」についてのニーズを持つような地域が多く、現場に関わる足がかりにさせていただきました。今では、いろいろとお声かけをいただき、私自身も数多くの勉強をさせてもらっています。

これから

私の研究仲間が「“バス”は会議室を走っていない。現場を走っているんだ!」とよく言っております。私もこれをモットーにさせていただきます、現場に行くように心がけています。そして、最近わかってきたことは、地域公共交通は、行政、交通事業者、地域住民などの主体がそれぞれの役割を適切に担いながら、取り組むことが重要であるということです。まちづくりについても同じようなことがいえると思います。

最後になりましたが、地域を取り巻く事情は厳しさを増していますが、前向きに取り組むことによって、なにか新しいアイデアが生まれるのではないかと思います。難しい問題は多々ありますが、現場を大切にしながら、いろいろと前向きに取り組んでいきたいと思っています。



会員紹介

古川のり子 (ふるかわ のりこ)

株式会社バイタルリード 総合計画部
略歴

1987年生 / 静岡県浜松市出身 / 2009年3月岡山大学環境理工学部環境デザイン工学科卒業 / 2011年3月岡山大学大学院環境学研究科博士課程前期修了 / 2012年4月株式会社バイタルリード入社 現在に至る



自己紹介

高校時代まで静岡県浜松市で育ちました。小学生のころから、環境問題やその背景にある自動車利用の問題、また日本が培ってきた文化や暮らしに対して強い関心がありました。特に、祖父母の実家が岡山県真庭市の中山間地域にあったということもあり、中山間地域が保有するすばらしい文化や風景には大変魅力を感じてきました。また、一方で抱えている過疎化や高齢化への問題意識も強く、大学院では中山間地域における公共交通の需要予測や住民意識、生活支援などに関する研究を行いました。

その後、現在の株式会社バイタルリード (鳥根県出雲市) に入社し、地方都市の公共交通計画の他、道路計画や整備における合意形成・PI (Public involvement) に関する業務、出雲大社周辺の交通対策や観光モビリティ・マネジメントに関する業務を中心に携わっています。

大学院の頃から関わってきた、出雲大社門前の「神門通り」の再生に関する一連のプロジェクトは、平成 25 年度に JCOMM (日本モビリティ・マネジメント会議) プロジェクト賞もいただきました。本プロジェクトの一つとして、道路整備の最中には現地の空き店舗を活用した継続的なオープンハウスの運営を行い、地域住民や観光客との合意形成に大きな役割を果たしたことを確認しています。また、周辺店舗等と協働で実施した観光モビリティ・マネジメントでは、出雲大社周辺の観光スポットへのまち歩きや駐車場選択変更の動機づけを行い、観光客の満足度向上や滞在時間の増加、消費金額の増加といった効果があったことを確認しています。

今後の抱負

入社後、様々な業務に携わる中で、土木事業や都市計画、交通計画などに関する「合意形成」の重要性を強く感じてきました。合意形成に対する認識は徐々に強くなってきていると思いますが、現場レベルでは、取組例が少ないことや認識のずれもありその手法が模索されています。今後は、これまでの業務経験やこれから進める業務での経験を活かし、こうした「合意形成」に関する実証的研究を進めたいと考えています。また、技術者としても、日々の業務の遂行、技術研鑽を通じて交通計画・都市計画に関する技術をより一層向上させるとともに、他業種・他分野の方との交流も広げ、より良い「まちづくり」に向けて取り組んでいきたいと考えています。

今後の活動予定

2014年度(第12回)通常総会・支部研究発表会

日時: 2014年4月5日(土) 9:40~(予定)

会場: 広島市まちづくり市民交流プラザ

北棟5階研修室C

□通常総会議事(予定)

- 1 平成25年度事業報告について
- 2 平成25年度収支決算報告について
- 3 平成26年度事業計画及び収支予算について
- 4 役員改選について
- 5 その他

□支部研究発表会(予定)

○都市計画研究発表会 7編

○招待論文発表 2名

橋本清勇氏(広島国際大学、准教授)

藤原章正氏(広島大学大学院、教授)

※プログラム等は、決まり次第、会員メール、支部HPでお知らせします。



国道183号 道後山付近の雪景色

編集後記

みなさま、本年も支部ニュースレターをご愛読下さいませよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

年が明けて早々に、我が家の庭に生え放しになっていた「ねむの木」2本をチェーンソーで伐採しました。10年近く経ち、高さが10m、根元の径は25cm程度にまで育っており、もし、我が家にまきストーブでもあれば、数年分の燃料を確保できたのではないかと思います。

つい先ごろ、「社会貢献型エネルギー活用の仕組みを考える」をテーマに「サステナブル・コミュニティづくりフォーラム」が、東広島市で開催されました。南ドイツにあるユニークなソーラー村として知られ「天国のような村」だといわれている人口830人のレッテンバッハ村のフィッシャー村長の講演です。ご存知の方も居られるとは思いますが、村民の自治を軸として、「若者が住みやすく、環境に優しい村づくり」を目標に掲げ、自然エネルギー、地域通貨、起業支援、交流拠点づくり、子育てなど総合的な取り組みを進めた結果、村に若者が集まり、人口のV字回復を実現させた小さなまちの話です。この自治と自立の幸福物語を聞き、ここから学び、日本の農山村地域の再生を考えようというのがフォーラムの狙いです。地域の資源を最大限に活用し、住民の生活を通して、様々な資源が循環し続ける理想的なシステムが構築されているのですが、何よりも、驚いたのは、一旦、地域再統合によって、隣村のシュテッテンに統合されたものを粘り強い戦いの末、統合されて15年後にはバイエルン州議会に再独立を決議させた「ぶれない村長の信念」でした。具体的な話は、横に置くとして、今の混乱の時代、ぶれない信念を持つキーマンが強く求められているのでしょうか。世相を反映するかのよう、百田尚紀のベストセラーで映画大ヒットの永遠のゼロの主人公や戦国時代の名軍師黒田勘兵衛などの歴史的人物が注目されています。また、イタリアACミランの本田圭佑や今年開催されるソチ五輪日本代表選手などスポーツ界は勿論のこと、政界においても、ぶれない信念を持つ人々の活躍が期待される所です。私自身も、ぶれ幅を少しでも狭める努力を続けられる一年になればとは思っていますが。

次号の配信は、5月の予定です。ホットコーナーやコラム、トピックスなど、学会員の皆様からの原稿をお待ちしております。何かございましたら、総務委員会事務局(藤岡総務委員長 e-mail : cp-fujioka@chiikikb.co.jp)までご連絡いただければ幸いです。

また、ご本人の了解が得られた講演会プレゼン資料につきましては、当支部HPに掲載させていただきますので、ご参照ください。

支部HP : <http://www.chiikikb.co.jp/c-plan/>

(文責:長谷山 弘志)

<p>編集委員:長谷山弘志(編集長)、池田亜依、周藤浩司、高田禮榮、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也、吉原俊朗</p>
--